## 天声人語

古い文章を読んでいて、この書き手には未来が見えていたのか、と思うことがある。武者小路実篤の「日米戦争はまさかないと思ふが」も、その一つだ。日本が米英との戦争を始める17年前、雑誌「文芸春秋」に載った▼「恐ろしいことは中々起つて来ないやうに見えて平気で起つてくるものである」。そう書き出す文章は、日米戦争のうわさが出ていることを懸念し、そんな戦争がいかにばかげているかを論じている▼いわく、日米が戦えば結果は明らかだ。米国も損をするだろうが、一番ばかを見るのは日本だ。戦争は国を富ますのではなく貧乏にするものだ……。「日本の運命は今実に大事な時で、狂ひかけてゐるのを感じる」とも▼真珠湾攻撃から戦争が始まったのが1941年12月8日である。残念ながら、その時の武者小路に非戦論者の面影はなかった。「真剣になれるのはいい気持だ。僕は米英と戦争が始まつた日は、何となく昂然とした気持で往来を歩いた」と開戦直後に書いている▼文豪の変わりようは、冷静さを失った日本の姿そのものであろう。国力の差に対する懸念は、勇ましい声にかき消された。言論弾圧そしてメディアの迎合により批判は失われていった。不況や貧困に対処できない政治は信頼を失い、軍人に光があたった▼非戦論者としての武者小路は「人間の殺しあいや、武力で勝負をきめるなぞと云ふ時代はもう過ぎてしまつていゝと思ふ」と述べていた。その理想は今もまだ成し遂げられていない。

2019・12・8

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。